

〈特集〉

## 巻頭の辞

阪 田 恭 代\*

### Introduction

SAKATA Yasuyo

本号、神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所 (GCI) 紀要『グローバル・コミュニケーション研究』(13号)は、河越真帆・GCI所長の提案で実現した神田外語大学 (KUIS) におけるSDGs教育の取り組みの特集である。

周知の通り、SDGs (Sustainable Development Goals) は、国連のMDGs (ミレニアム開発目標) (2000～15年)の後継として、2015年に国連総会で全会一致で採択された「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ (Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development)」決議のなかで明示された17個のグローバルな開発目標である。SDGsは一般的には「持続可能な開発目標」(下線筆者)と訳されているが、ここでは「持続可能な発展目標」(下線筆者)とも表現したい。「開発」とは一般的に発展途上国の開発・経済発展を指す言葉だが、SDGsは“leave no one behind”(誰一人取り残さない)という精神で、発展途上国のみならず先進国を含めた世界の「みんな」を対象にした概念に進化しているため「発展」という言葉も使う。

SDGsは様々な視点からその価値を評価できる。筆者の専門領域、国際関係学からは次のような価値を見出せる。平和を維持・創造していくためには不断の努力が必要であり、決して油断できない。平和を実現するため

---

\* 神田外語大学 グローバル・リベラルアーツ学部グローバル・リベラルアーツ学科 教授

には様々な道があるが、国際関係学のリアリズム、リベラリズム、グローバリズムの三つの分類を使うならば、SDGsは21世紀の「グローバリストの平和」の代表格である<sup>1)</sup>。21世紀のグローバル化(グローバリゼーション)の「負」の側面(グローバル資本主義と貧富の格差、環境破壊・地球温暖化の進展など)を是正すべく、国連ミレニアムサミット(2000年)でMDGsが誕生し、それをSDGsが継承した。

SDGsが追求する「持続可能な開発・発展」とは、環境・社会(人権)・経済をセットで進める包括的(comprehensive)なアプローチであり、「誰一人取り残さない」、全ての人々がステークホルダー(利害関係者)となる包含的(inclusive)なアプローチを原則としている。つまり人々の「共生」(co-existence)だけでなく「参画」(participation)を求めている。最後のSDGsゴール17の地球・社会・経済のための「開発・発展のためのパートナーシップ」は国連のような国際機関のみならず政府、CSO(Civil Society Organizations: 市民社会団体)(NPOやNGO)、民間組織や企業、教育機関、学生や市民、地方自治体やローカル・コミュニティなどあらゆるアクターの参画と協働(コラボレーション)が求められている。大学という高等教育研究機関も大事なアクターの一つだ。

以上の通り、SDGsは極めて理想的な目標であるが、厳しい現実があるからこそ道を見失わないよう目標を高く掲げている。そして、理想のかけ声で終わらないよう、MDGsと同様に、SDGsも「2030アジェンダ」の示す通り、15年間という期間を設けてプラクティカルな達成目標を設けている。2023-24年現在、SDGsはちょうどミッドポイント(中間地点)を迎えている。新型コロナ禍(2020-2022年)の影響で目標達成は遅延しているが、SDGsも残すところあと7年だ。2030年が期限だとしても、「開発・発展」のための取り組みは継続され、ポスト2030アジェンダとしてSDGs第2期も進化した形で継承されていくだろう。

SDGsが中間地点を迎えている今だからこそ、SDGsについて改めて考え

---

1) 阪田恭代「国際関係における平和と安全保障～国家を守る、国際社会を守る、人間を守る」『グローバル・コミュニケーション研究』7号(2019), 13-23頁、AsKUIS(神田外語大学学術情報リポジトリ) <http://id.nii.ac.jp/1092/00001559/>

## 巻頭の辞

る価値はある。今がSDGs第1期(2015～2030年)だとしたら、今まで何が行われ、ポスト2030を見据えて、残りの期間に何ができるのであろう。その中で大学が担うべき役割とは何か。神田外語大学における取り組みについて知ること、考えることは時宜に適っている。

神田外語大学ではSDGs前から持続可能な発展・サステナブルな社会を意識した多くの活動がある。ここではその活動の一端を紹介する。筆者が外国語学部で担当した研究演習(ゼミ)では、2017年以降、SDGsにまつわる学生プロジェクトを進めてきた。2021年度プロジェクト(代表:英米語学科3年・熊井りんさん)ではSDGsにおける大学の役割を考えることをテーマに、神田外語大学におけるSDGs活動を検証し、『SDGsネイティブからの変革への提言～KUISが未来のためにできること～(Voices from SDGs Natives: Transforming Our Future with KUIS)』を編集・発行した。

提言書より一節を紹介したい。学生たちは自らを「SDGsネイティブ」と呼んだ。「SDGsネイティブ」とは「いわゆる『ミレニアム世代』から『Z世代』の中でも、特に環境問題や社会問題に強い関心を持ち、その解決に積極的に貢献したいと考える世代である」とし、「私たちは「SDGsネイティブ」として(国連が定めた)「行動の10年(Decade of Action)」(2020～2030年)において持続可能な未来のために具体的な行動を起こすことを目標とした」という意思を表明した。そのためにSDSN(Sustainable Development Solution Network)のマッピング手法を用いて、学生団体、教職員、学長と学長室へのインタビューを実施し、限られた数ではあったが、大学内の活動をマッピングした。ワトキンス聡子・SALCアドバイザーの協力を得て、本学のSALC Learners' Eventとして学生・教職員とともにワークショップを開催し、提言について議論した。プロジェクトに協力していただいた宮内孝久学長と学長室の松戸きよみさんと外間エックスタイン絵海さん、そしてSDGsのパディである石井雅章先生らもワークショップに参加した。

プロジェクト調査を通して、学生たちは、学内にSDGsにまつわる活動が多くあることを知るとともに、それらが全くつながっていない、お互いの活動を知らないことを痛感した。このままでは大学にとって損失であり、持続可能な社会づくりのために大学の力を発揮できないと憂慮した。

そのために「KUIS SDGs2030 行動の10年の計画」を提唱し、第一段階としてKUIS SDGsプラットフォームを構築することを提言した。活動のインフラとなるプラットフォームを作り、大学におけるガバナンス(事務局など)、教育・研究(教員・学生)、社会貢献活動(学生)の三領域をつなげ、学内の活動について知り、相互に情報共有し、協働する仕組みを作る。プロジェクトの翌年(2022年度)、学長室とゼミ・メンバー(イベロアメリカ言語学科4年・岡野美海さん)が協議を継続し、後輩の学生たちにバトンタッチして、2023年に学生団体(愛好会)KUIS DGtaLink(代表、英米語学科2年・寺田遥音さん; 副代表、国際コミュニケーション(IC)学科4年・山本優依さん)が発足した。KUIS DGtaLinkとはKUISの活動をデジタルにリンクするという意味だ。彼らは大学内のSDGs活動を支えるためのデジタルプラットフォームを構築し、学内の活動を「見える化」し、諸団体・組織とのコラボレーションを通して、SDGsを含むサステナブルな社会づくりの活動のサポートを目指している(情報提供: 同団体メンバー、英米語学科4年・吉本怜央さん)。デジタルプラットフォームは今春、公開される(乞うご期待)。

偶然であるが、GCIの本号(13号)はKUIS DGtaLinkのプラットフォームの公開と軌を一にする。また偶然にも、本号で、上記のゼミプロジェクトに協力・参加していただいた教職員の取り組みが紹介される。石井雅章先生(GLA学部)の「神田外語大学の正課科目におけるSDGsの取り組み」では4つの担当科目を事例に、SDGsを直接・間接的に利用したパターンを紹介し、サステナビリティの教育を展開している。本学の英語教育に携わる教職員の取り組みの報告もある。SALC(Self-Access Learning Center)のワトキンス聡子・准教授と林千絢・教育支援部(英語教育・自立学習支援チーム)職員は「SDG Awareness Week—SALCのプロソーシャルなコミュニティの育成と自律的かつ協働的な学びの支援—」において、SALCの自立学習教育に「プロソーシャル(pro-social)」という概念を導入し、プロソーシャルなアクティビティとして2019年からSALC SDG Awareness Weekを開催し、自立学習を通して社会課題へのアウェアネスを促進している。本学ELI(English Language Institute)のPhilip Cardiff講師は、国連UNESCOの「持続可

## 巻頭の辞

能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD)」と「コアなサステナビリティ・コンペテンシー (能力) (Key Sustainability Competency: KSD)」を取り入れた実践例として IC 学科の学生を対象とした英語選択必修科目 (UN Sustainable Development Goals: Key issues and Taking Action) を紹介している (Cardiff 講師は上記ゼミプロジェクトの学生調査に協力していただいた)。以上の通り、SDGs 時代とともに、SALC や ELI の教育活動も、語学・文化活動のみならず社会課題も意識した内容に変容している。本学の事務局主導の活動として発足 10 周年を迎えるボランティアセンターの活動も紹介された。玉造美恵 (産官学・地域連携部ゼネラルマネージャー) とボランティアセンター職員の角田愛子、長尾明子、遠藤誠による「報告ノート KUIS の正課外活動における SDGs の取り組み—学生団体 55!MAKUHARI の成り立ちと活動について—」では、同センターの地域・社会活動の支援、センター管轄のサークル (ボランティア・ユニオン) に所属している MAKE SMILE (東日本大震災被災者への支援、現地の児童館等での活動)、Habitat for Humanity (国連 Habitat と関連、海外で住居支援)、Hello Time (幼児・児童の読み聞かせ) や、センターの学生スタッフ募集から始まった学生団体「55! (ゴーゴー) MAKUHARI」(2019 年発足) をフィーチャーしている。同団体は発足直後からコロナ禍で活動が制限されながらも、SDGs を自分ごとにして、学内でコンタクトレンズの空ケースやペットボトルキャップの回収を展開し、収益を日本アイバンク協会や JCV (NPO 法人「世界の子どもにワクチンを」日本委員会) に寄付し、SDGs17 の開発・発展のためのパートナーシップを実践している。

以上の通り、数例ではあるが、本学においても持続可能な未来をつくるために SDGs に関連する教育・社会貢献活動が様々な形で実践され、進化している。KUIS DGtaLink のデジタルプラットフォームのページも今春に開設され、学内の様々な活動が可視化され、LINK する (つなげる) きっかけとなるであろう。様々な活動がプラットフォームでつながり、大学における人々の力が結集し、これからもサステナブル (持続可能) な未来づくりの輪が広がることが期待される。「SDGs ネイティブ」の提言通り、行動計画 10 年は進展中だ。KUIS も新たなステージに突入だ。